

マチカネタンホイザ

ビワハヤヒデ

トウカイテイオー

小川隆行

アイドルホース列伝

1970-2021

史実を知れば、
もっと好きになる。

昭和から令和まで
時代を超えて語り継がれる
スターホースの伝説を一冊に

全101頭

ディーピンパクト

ダイワスカーレット

ゴールドシップ

トウカイテイオー

スペシャルウィーク

オグリキャップ

アイドルホース列伝 1970-2021

小川隆行

星海社

182



「アイドルホース」と聞いて、みなさんはどんな馬を思い浮かべるだろうか。

G I優勝馬。見栄えの美しい馬。ストーリー性のある馬。追いかけて続けた馬。馬券で儲けさせてくれた馬。

十人十色、いや百人百色だろう。共通するのは「人生を楽しくさせてくれた馬」であり、かけがえのない存在。忘れられない馬、ということになる。

本書では競馬予想家や競馬雑誌編集者、ホースライター、カメラマン、ウインズで働いていた競馬好き、一般の競馬ファンなど「年季の入った、競馬への情熱にあふれた」方々に「マイ・アイドルホース」を描いてもらった。

元祖アイドルホースと言われるハイセイコーから、白毛の桜花賞馬ソダシまで全101頭。百頭百様の描き方だが、必ずや琴線に触れる馬がいるはず。個々の馬に関する物語性や、知られざるエピソードを楽しんでもらえたら幸いだ。

目次

まえがき 3

50音順馬名索引 12

第1章

伝説のチャンピオン 1970・1980年代 15

ハイセイコー (特別寄稿)

どうしたって忘れるわけにはいかない「おれの人生の馬」 吉川良 16

ミスターシービー

常識外れの追い込みをみせたアイドルホース 22

シンボリルドルフ

ダメ学生に教えてくれた競馬のおもしろさ 28

オグリキャップ

人間の思惑に負けなかった怪物の「奇跡の走り」 34

コラム1 日本競馬史上最高の3強対決は? 40

テンポイント

貴公子が教えてくれた「楽しさと悲しさ」 46

マルゼンスキー

2着を13馬身もチギった「隠れ最強馬」 47

第2章

黄金時代の熱狂

1990年代・前半

57

メジロマックイーン
トウカイテイオー
ミホノブルボン
ライスシャワー
ナリタブライアン

史上最強ステイヤーの「降着劇」&「心肺機能」
自分史上最高のグッドルッキングホース
二冠馬を誕生させた名調教師の信念
小さな身体の「スーパーステイヤー」
怪我に泣かされた「シャドーロールの怪物」

58

84

シリウスシンボリ
イナリワン
ゴールドシチー
タマモクロス
サクラチヨノオー
スーパークリーク
バンブーメモリー
メジロアルダン
ヤエノムテキ

今では考えられない「馬主と調教師」の対立劇
「人気はあちら、お金はこちら」——競馬の奥深さを教えてくれた馬
「懐かしきコーチ屋」が教えた？ 皐月賞激走馬
GI3勝馬&怪物も敵わない「天皇賞春秋制覇」
人気先行の評判を覆した差し返し
「日本一の相馬眼」に導かれた菊花賞制覇
日本競馬のアイドルに負けない才能とタフなハート
オグリのラスト有馬で魅せた「雄大な馬体」
GI2勝を挙げた「5番バッター」

48

49

50

51

52

53

54

55

56

- アイネスフウジン
イクノディクタス
ダイタクヘリオス
ホワイストーン
メジロパーマー
メジロライアン
ツインターボ
ナイスネイチャ
サクラバクシンオー
ニシノフrawー
マチカネタンホイザ
ウイニングチケット
ナリタタイシン
ビワハヤヒデ
ホクトベガ
ユキノビジン
- 下り坂ジョッキーを開花させた恩師 94
安楽死のほずが一転、牝馬歴代賞金女王に 95
新聞が読めた…GI連覇の破天荒マイラー 96
初のハナ逃走——「勝てない馬」から感じたオーラ 97
めっちゃめっちゃなローテもなんのその！ 98
横山典弘がみせた執念のレース運び 99
大敗上等！玉碎覚悟の小柄な大逃げ馬 100
41戦中3着以上21回。競馬史に輝く馬主孝行馬 101
父と母から受け継がれ、子孫に受け継いだ「スピード」 102
1番人気で二度惨敗——大金勝負で得た教訓 103
GI善戦マンは大種牡馬の稼ぎ頭 104
「騎手を辞めてもいい」と語ったベテランの技 105
理想の3強——「二番のキレ者」 106
馬主に騎手交代を迫られ苦悩した調教師 107
ドバイで安楽死となった無敵のダート女王 108
“美人薄命”のイメージを残した“美少女” 109

第3章

天才たちの祭宴

1990年代・後半

113

ビコーペガサス
ヒシアマゾン

追いかけて続けて大惨敗も、10年後の大どんでん返し
出走が認められていれば…確実だった「三冠牝馬」
110
111

サイレンススズカ
スペシャルウィーク
ステイゴールド
ティエムオペラオー
ハルウラフ（特別寄稿）

稀代の逃げ馬の故障に涙した武豊の人間性
ライバルと戦いつづけた「ザ・主人公」
114
120
50戦目の初GIに「嬉しさの罵声」——超絶異色ホース
騎手と調教師の絆から生まれたGI7勝馬
134
1—3連敗を喫した「負け組の星」、浮かんた「ひとりの火」
吉川良
140

コラム3 最高に盛り上がった史上**最強馬** & 史上**最強世代**

146

ヒシアケボノ
フジキセキ
マーベラスサンデー
マヤノトップガン
エアグルーヴ

JRA史上最高馬体重のGIウイナー
クラシック直前に故障引退——読み間違えた皐月賞
150
「GI馬に」との念願を果たした宝塚記念
おそい目覚めからGI4勝馬へ駆け上がる
152
女傑と呼ぶに相応しい、牝馬初の年度代表馬
153
154

第4章

日本競馬の結晶 2000年代

167

- シンコウウインディ
サニーブライアン
シーキングザパール
タイキシヤトル
マチカネフクキタル
メジロドーベル
エルコンドルパサー
キングヘイロー
グラスワンダー
セイウンスカイ
アドマイヤベガ
メイショウドトウ
- 引退後は甘くなった「噛みつき癖」 155
二冠馬が教えてくれた「競馬業界の醍醐味」 156
断然人気タイキシヤトルを交わした直線一気 157
怒濤の重賞8連勝——史上最強短距離ホース 158
風に飛ばされた「福」の馬券 159
手作りイラストを喜んでくれた担当厩務員 160
凱旋門賞をグッと近づけた「海外遠征馬」 161
予先を変えつつ、11度目の挑戦で念願の王者に
オトコが惚れるオトコ馬 162
エリートを打ち破った地味な二冠馬 163
私的POG史上、最大のライバル馬 164
5度も2着の惜敗馬に訪れた「最大のチャンス」 165
史上最強馬は史上最高の経済動物でもあった 166
ライバル・ウオッカを圧倒した史上最強牝馬 167
歴史に残る名牝を育て上げた角居勝彦の感性 168
ウオッカ 169

アグネスデジタル 単勝馬券の重要性を教えてくれた「万能型横綱」 192

エアシャカール 世代レベルで見劣る「準三冠馬」 193

アグネスタキオン 大いなる夢想——幻の「GI9勝馬」 194

シンボリクリスエス 名伯楽の本気が演出した圧勝劇 195

マンハッタンカフェ 春先1勝も頂点まで駆け上がった3歳秋 196

アドマイヤドン ダートGI戦の格を高めた芝ダートGI馬 197

ジャングルポケット いなないたダービー馬と「鬼の形相」を見せた横綱 198

ファインモーション 3代のオークス馬をまとめて破った「無敗の四冠牝馬」 199

ゼンノロブロイ 買ってはハズレを繰り返した秋古馬三冠ホース 200

キングカメハメハ NHKマイルからダービーに向かった万能の「大王」 201

コスモバルク 良くも悪くも闘争心が魅力の「史上最多GI出走馬」 202

スリープトウショウ 気性難の切れ味：男勝りの「S牝馬」 203

ダイワメジャー パニックにノド鳴り——忘れられぬ名馬の腹ばい 204

ハーツクライ 運命を変えた4歳秋の「不器用馬の迫力」 205

カワカミプリンセス まさかの降着：当たりハズレの悲喜こもごも 206

第5章

新たな夢の時代へ

2010年代

213

- エスポワールシチー
スマートファルコン
トーセンジョーダン
ナカヤマフエスタ
ブエナビスタ
一口馬主史上最高の回収率Ⅱ「超馬主孝行馬」
地方競馬を主体にしたダートホース
ブエナビスタを破った二世一代の激走
凱旋門賞挑戦のハードルを下げた？ まさかの銀メダル
牝馬史上最高賞金を獲得した「所懸命な娘」
- 207
208
209
211
210

- オルフェーヴル
ゴールドシップ
キタサンブラック
アーモンドアイ
コントレイル
記録より記憶に残る型破りな三冠馬
いつ走るかわからない：競馬ファンを翻弄した気分屋
血統常識を打ち破った「異色のGⅠ7勝馬」
ダービー出走、凱旋門賞挑戦：国枝師の夢と無念
偉大なる父を超えるか、史上8頭目の三冠馬
- 214
220
228
234
240

コラム5 海を渡り **本場の舞台** に挑んだ日本馬たち

246

- ア。パ。パネ
エイシンフラッシュ
三冠牝馬、二つのGⅠ制覇にみる「危うさと成長」
騎士の魂が描いた「競馬史を彩るワンシーン」
- 250
251

カレンチャン

恋愛もうまくこなしたアイドルホース 252

フィエールマン

初めてのWIN5の中をもたらしにくれた馬 253

ジュンテイルドンナ

悔しい思いをした三冠牝馬——個人馬主の巻き返し 254

ロジャーバローズ

競馬ゲーム史上最高配当のお宝ダービー馬 255

オジュウチョウサン

障害飛越が刺激に？ ルーティン嫌い障害王のGI5連勝 256

サトノダイヤモンド

惚れ惚れするパドック、勝負した単勝 257

リスグラシュー

外国人ジョッキーの手腕で手にした「ゴールドコレクター」 258

グランアレグリア

年度代表馬を破ったGI3連勝の「短距離女王」 259

デアリングタクト

馬主孝行の三冠牝馬、祖母たちは2・3着 260

ソダシ

日本一のオーナーが築いた白毛初のGI馬 261

シーザリオ（特別寄稿）

私の中のキーホース「追悼シーザリオ」——瀬恵菜（桜花のキセキ） 262

あとがき 268

執筆者紹介 270

ア行

アーモンドアイ	234
アイネスフウジン	94
アグネスタキオン	194
アグネスデジタル	192
アドマイヤドン	197
アドマイヤベガ	165
ア。パ。ネ	250
イクノデイクタス	95
イナリワン	49
ウイニングチケット	105
ウオツカ	180

エアグルーヴ 154

エアシャカール 193

エイシンフラッシュ 251

エスポワールシチー 207

エルコンドルパサー 161

オグリキャップ 34

オジュウチョウサン 256

オルフェーヴル 214

カ行

カレンチャン 252

カワカミプリンセス 206

キタサンブラック 228

キングカメハメハ 201

キングヘイロー 162

グラスワンダー 163

グランアレグリア 259

ゴールドシチー 50

ゴールドシップ 220

コスモバルク 202

コントレイル 240

サ行

サイレンススズカ 114

サクラチヨノオー 52
 サクラバクシンオー 102
 サトノダイヤモンド 257
 サニーフライアン 156
 シーキングザパール 157
 シーザリオ 262
 ジェンティルドンナ 254
 ジャングルポケット 198
 シリウスシンボリ 48
 シンコウウインディ 155
 シンボリクリスエス 195
 シンボリドルフ 28
 スーパートウショウ 203
 スーパークリーク 53

ステイゴールド 128
 スペシャルウィーク 120
 スマートファルコン 208
 セイウンスカイ 164
 センノロブロイ 200
 ソダシ 261
 タイキシヤトル 158
 ダイタクヘリオス 96
 ダイワスカレット 174
 ダイワメジャー 204
 タマモクロス 51
 ツインターボ 100

タ行

デアリングダクト 260
 デイープインパクト 168
 テイエムオペラオー 134
 テンポイント 46
 トウカイテイオー 64
 トーセンジョーダン 209
 ナイスネイチャ 101
 ナカヤマフェスタ 210
 ナリタタイシン 106
 ナリタブライアン 84
 ニシノフラワー 103

ナ行

ハ行

ハーツクライ	205
ハイセイコー	16
ハルウララ	140
バンブーメモリー	54
ビコーペガサス	110
ヒシアケボノ	150
ヒシアマゾン	111
ビワハヤヒデ	107
ファインモーション	199
フイエールマン	253
ブエナビスタ	211
フジキセキ	151

ホクトベガ 108

ホワイトストーン 97

マ行

マーベラスサンデー	152
マチカネタンホイザ	104
マチカネフクキタル	159
マヤノトッポガン	153
マルゼンスキー	47
マンハッタンカフェ	196
ミスターシービー	22
ミホノブルボン	72
メイショウドトウ	166

メジロアルダン 55

メジロドーベル 160

メジロパーマー 98

メジロマツクイーン 58

メジロライアン 99

ヤ・ラ・ワ行

ヤエノムテキ 56

ユキノビジン 109

ライスシャワー 78

リスグラシュー 258

ロジャールローズ 255

オグリキャップ。

人間の思惑に負けなかった怪物の
「奇跡の走り」

1985年生まれ

牡

芦毛



地方競馬出身の馬が中央競馬に転厩してGIを勝つ。「雑草」が「エリート」を破るストーリーは、エリートになれなかった多くの競馬ファンにシンパシーを与える。

バブル絶頂期の1987年に笠松競馬でデビューしたオグリキャップは、旧3歳時に笠松在籍中に12戦を走り10勝2着2回。あまりの活躍ぶりに、所有する小栗孝一氏は中央競馬の馬主資格をもつ佐橋五十雄氏へ売却、オグリは栗東・瀬戸口勉厩舎に転厩した。

中央初戦のペガサスS(GIII)を快勝すると、毎日杯・京都4歳特別(現京都新聞杯)を連勝。通常なら日本ダービーに出走する快進撃だが、クラシック登録がなかったため「幻のダービー馬」と呼ばれることになる。この表現が過剰でないのは、その後の快進撃が物語っている。「断念ダービー」のニュージラランドTを優勝すると、高松宮杯(2000m)をレースレコードで、休養明け初戦の毎日王冠も手にするなど、当時のレコード記録となる重賞6連勝(地

方重賞を合わせると現在もナンバーワンとなる11連勝)で秋の天皇賞に挑んだ。

春の天皇賞馬で天皇賞春秋連覇を目指すタマモクロスに1馬身ほど及ばなかったが、緑のターフに映える芦毛同士のワンツーフィニッシュ2頭の一騎打ちは競馬ファンを熱狂させた。続くジャパンCでタマモクロスへの雪辱に挑むも、馬群に囲まれた3コーナーで動けず、ペイザーバトラーとタマモクロスに及ばずの3着。秋4戦目の有馬記念では、馬主の意向で騎乗した岡部幸雄がタマモクロスよりも先に仕掛け、オグリに初の中央GⅠをもたらし、連戦の疲れから9カ月ほど休養したオグリキャップだが、馬の所有権が佐橋氏から近藤俊典氏へとトレードされた。購入費用は5億円とも言われ、回収せねばならない事情もあり、オグリに過酷なローテーションが組まれることとなる。

秋初戦のオールカマーと毎日王冠を連勝。春の天皇賞を制したイナリワンとのマッチレースは多くのファンを魅了した。続く秋の天皇賞でスーパークリークの2着に敗れると、今では考えられないローテが選ばれた。

マイルCSとジャパンCの連闘である。

マイルCSではともに単枠指定されたバンブーメモリーとの一騎打ち。4コーナーでスムーズに進出したバンブーメモリーに対し、オグリは前が壁になる。ようやく抜け出すもバンブーメモリーは1馬身ほど先にいる。誰もが負けた、と思った次の瞬間、内から迫り同時に

ゴールイン。微差という表現が相応しいハナ差の勝利に、鞍上の南井克巳は「オグリの勝負根性に助けられた」と涙を流した。

翌週のジャパンC。前半1000m58秒5のハイペースを5番手追走したオグリは直線で抜け出し、7歳牝馬ホーリックスとマッチレース。実況アナウンサーが「オグリ頑張れ！」と絶叫した直後、クビ差の2着でゴールイン。芝2400m2分22秒2の決着は16年間破られぬ世界レコードとなった。

激戦続きの過酷なローテーションから疲労が溜まったのだろう、続く有馬記念を5着に敗れると半年間の休養をとった。引退のプランもあったが、あまりの人気からJRAが現役続行を頼んだとも言われている（詳細は定かではないが）。

復帰戦の安田記念を武豊の手綱で快勝、GI3勝目をマークすると、続く宝塚記念は2着惜敗。レース後に骨膜炎を発症したオグリは海外出走プランを断念、国内に専念した。

GIを複数勝利した競走馬は、多くても20戦ほどで引退するが、常に闘志を発揮しながらオグリは5歳秋の天皇賞で30戦目を迎えた。故障による調整の遅れや、道中で舌を出すなど集中力を欠いて6着敗退。続くジャパンCは11着。

誰もが「オグリは燃え尽きた」と感じた。

32戦目となる有馬記念のオグリも、ピークにはほど遠かった。中山のパドックで目にした

馬体からは好調時の気合や闘争心は消え失せ、^{*}トモの送りもぎこちなく、かつての「怪物」の雰囲気は感じられない。

私も「厳しそうだ」と感じた。

しかし、超のつくスローペースを折り合ったオグリは3コーナー手前で進出を開始、4コーナーでホワイトストーンを交わして先頭に立つ。後方からメジロライアンが伸びてくるも1馬身ほど届かない。本命を打っていた大川慶次郎氏が解説席で「ライアン！」と叫んだのも束の間、怪物は引退レースで奇跡の復活を果たした。

このときのスタンドの大興奮は今でも忘れられない。17万人を超えるファンの多くが喜怒哀楽を表していた。絶叫する若者、涙ぐむ女性、「ありがとう！」と大声で感謝するおじさん。馬券の当たりハズレに関係なく多くの人が「オグリ！ オグリ！」と声を上げる。競馬場が一つになった初の瞬間だった。

有馬記念の前日、JRAの年間馬券売り上げは史上初めて3兆円を超えた。2年前は1兆円台だったが、オグリの登場で倍近く伸びた。加えて競馬場の入場人員も8年ぶりに1千万人を突破している。

競馬ファンを増やした功労馬オグリキャップ。そのラストランは競馬史上最高の感動レースだった。

(小川隆行)

^{*}トモ 腰と脚と尻を含めた馬体の後軀部分



劇的なラストランとなった1990年有馬記念では場内に何度もオグリコールが響き渡った。

3代血統表

ダンシングキャップ 1968 芦毛(米)	Native Dancer 1950 芦毛(米)	Polynesian 1942 黒鹿毛(米)
		Geisha 1943 芦毛(米)
	Merry Madcap 1962 黒鹿毛	Grey Sovereign 1948 芦毛(英)
		Croft Lady 1958 栗毛(英)
ホワイトナルビー 1974 芦毛	シルバーシャーク 1963 芦毛(愛)	Buisson Ardent 1953 鹿毛(仏)
		Palsaka 1954 芦毛(英)
	ネヴァーナルビー 1969 黒鹿毛	ネヴァービート 1960 栃栗毛(英)
		センジユウ 1963 黒鹿毛

オグリキャップ

父 ダンシングキャップ

最終成績 32戦22勝 (有馬記念2勝 マイルCS 安田記念)

母 ホワイトナルビー

距離適性 短～長距離

母の父 シルバーシャーク

脚質 先行

全成績

年月日	競馬場	レース名	距離	人気	着順	騎手	タイム	馬体重	勝ち馬(2着馬)
1987/05/19	笠松	サラ系3才新馬	ダ800良	2	2	青木達彦	0:50.1	452	マーチトウショウ
1987/06/02	笠松	サラ系3才イ	ダ800良	1	1	加藤一成	0:51.1	450	(ノースヒーロー)
1987/06/15	笠松	サラ系3才イ	ダ800重	1	1	青木達彦	0:49.8	456	(フエートチャールス)
1987/07/26	笠松	サラ系3才イ	ダ800良	1	2	加藤一成	0:50.3	470	マーチトウショウ
1987/08/12	笠松	サラ系3才イ	ダ800良	1	1	加藤一成	0:49.7	470	(マーチトウショウ)
1987/08/30	笠松	秋風ジュニア	ダ1400良	1	1	安藤勝己	1:30.3	476	(マーチトウショウ)
1987/10/04	笠松	ジュニアクラウン (G)	ダ1400良	1	1	安藤勝己	1:29.4	472	(マーチトウショウ)
1987/10/14	中京 (地)	中京盃 (G)	1200良	1	1	安藤勝己	1:10.8	470	(アーデントラブ)
1987/11/04	名古屋	中日スポーツ杯	ダ1400不	1	1	安藤勝己	1:29.8	476	(ハロープリンセス)
1987/12/07	笠松	師走特別B2	1600良	1	1	安藤勝己	1:44.4	482	(ヤングオージャ)
1987/12/29	笠松	ジュニアGP (G)	1600良	1	1	安藤勝己	1:45.0	482	(トウカイシャーク)
1988/01/10	笠松	ゴールドジュニア	1600不	1	1	安藤勝己	1:41.8	486	(マーチトウショウ)
1988/03/06	阪神	ベガサスS (GB)	1600良	2	1	河内洋	1:35.6	482	(ラガーブラック)
1988/03/27	阪神	毎日杯 (GB)	2000重	1	1	河内洋	2:04.8	476	(ファンドリデクター)
1988/05/08	京都	毎日放送杯4歳特別 (GB)	2000稍	1	1	南井克巳	2:03.6	480	(コウエイスパート)
1988/06/05	東京	NZT4歳S (GB)	1600良	1	1	河内洋	1:34.0	480	(リンドホシ)
1988/07/10	中京	高松宮杯 (GB)	2000良	1	1	河内洋	1:59.0	478	(ランドヒリュウ)
1988/10/09	東京	毎日王冠 (GB)	1800稍	1	1	河内洋	1:49.2	494	(シリウスシンボリ)
1988/10/30	東京	天皇賞(秋) (GI)	2000良	1	2	河内洋	1:59.0	492	タマモクロス
1988/11/27	東京	ジャパンC (GI)	2400良	3	3	河内洋	2:25.8	494	ペイザバトラ
1988/12/25	中山	有馬記念 (GI)	2500良	2	1	岡部幸雄	2:33.9	492	(タマモクロス)
1989/09/17	中山	産経賞オールカマー (GB)	2200良	1	1	南井克巳	2:12.4	490	(オールダッシュ)
1989/10/08	東京	毎日王冠 (GB)	1800稍	1	1	南井克巳	1:46.7	498	(イナリワン)
1989/10/29	東京	天皇賞(秋) (GI)	2000良	1	2	南井克巳	1:59.1	496	スーパークレーク
1989/11/19	京都	マイルチャンピオンS (GI)	1600良	1	1	南井克巳	1:34.6	496	(パンブーメモリー)
1989/11/26	東京	ジャパンC (GI)	2400良	2	2	南井克巳	2:22.2	496	ホーリックス
1989/12/24	中山	有馬記念 (GI)	2500良	1	5	南井克巳	2:32.5	496	イナリワン
1990/05/13	東京	安田記念 (GI)	1600良	1	1	武豊	1:32.4	496	(ヤエノムテキ)
1990/06/10	阪神	宝塚記念 (GI)	2200良	1	2	岡潤一郎	2:14.6	500	オサイチジョージ
1990/10/28	東京	天皇賞(秋) (GI)	2000良	1	6	増沢末夫	1:58.9	500	ヤエノムテキ
1990/11/25	東京	ジャパンC (GI)	2400良	4	11	増沢末夫	2:24.1	496	ベタールスンアップ
1990/12/23	中山	有馬記念 (GI)	2500良	4	1	武豊	2:34.2	494	(メジロライアン)

[22-6-1-3]

日本競馬史上最高の3強対決は？

「競馬史上最強の3強対決」と言われた20年のジャパンC。史上最多の芝GI8勝馬アーモンドアイに挑んだのは、三冠馬コントレイルと同じ年の三冠牝馬デアリングタクト。稀有な三冠馬が牡牝そろって誕生し、そこに絶対王者が君臨するという構図は、競馬ファンの域を超えて世間の注目を集めた。仮に入場制限がなければ、東京競馬場は間違いなく超満員になっただろう。

アーモンドアイの引退により史上最強対決は一瞬の夢となったが、かように3強対決はファンを魅了する。なぜだろう。ディープリンパクトのように1強では本命馬にしか目が行かず、ミスターシービーVSシンボリドルフのような2強対決は突如、第三の馬が出現する。かといって、4頭5頭も優勝候補がいると焦点がバラける。3頭という混戦状況は本命党も穴党も、老いも若きも男も女も魅了する好バランスなのだ。

競馬史初の3強といえば「タケシバオー・マーチス・アサカオー」。筆者は生まれたばかりで競馬のケの字も知らなかった。「芝1000mから3200m、果てはダートまで勝ったタケシバオー」「栗毛の人気馬マーチス」「東西の2歳王者（現表記）を破ったアサカオー」の3頭が争った皐月賞をYouTubeで観ると、馬場の六分どころを走った3頭は4着以下を突き放している。場内には傘の花が咲いており、かなりの不良馬場だったようだ。

小学生になると「テンポイント」という名前を初めて知った。日経新春杯で骨折後、悲劇の死を遂げた、という話を聞いたが、それが私的な競馬への入場門だった。高校生になり、ミスターシービーのファンになると、父がライバルだったトウショウボーイだと知り、同馬に興味をもった。印象深いのは「遅咲き」だったグリーングラス。「菊花賞の単勝（5250円）を狙い撃ちした」という佐藤洋一郎氏の回顧で穴馬券にそそられた。

高校生になり、バイト代をそっくり入れたのが（3強ではないが）ミスターシービーとシンボリルドルフのジャパンC。わずかに数分で資金が4倍になるとワクワクしたが、1番人気ミスターシービーは後方ママ。レース後「競馬は甘くない」と悟ることに。

競馬関連の仕事がしたい。そう思わせてくれたのが「オグリキャップと仲間たち」だった。タマモクロスとの芦毛対決が終わると、スーパークリーク&イナリワンの3強対決に移行していた。新人最多勝記録を更新した武豊が2年目にスーパークリークで菊花賞を勝つと、3年目にイナリワンで春の天皇賞を制覇。4年目にオグリキャップで有馬記念を制している。デビュー4年で3強すべてに騎乗したのだから、文字通り天才騎手である。騎乗馬がさほど重ならなかったのも、武豊の天運だった気がする。

仕事で競馬に係わるようになると、「アイネスフウジン・メジロライアン・ハクタイセイ」の3強対決がやってきた。ハクタイセイが勝った皐月賞の後、Numberで井崎脩五郎氏が書いていた

「アイネスフウジン」の逃げにメジロライアンの差しで決まる」との一文にピンときて馬連1点勝負。馬券が当たったことよりも、場内の中野コールを聞きながら「遅咲きの美しさ」を体感した。

3年後の日本ダービーは「ウイニングチケット・ビワハヤヒデ・ナリタタイシン」。ダービーを勝ったら騎手を辞めてもいい、と語った柴田政人にライバル岡部幸雄と若手の武豊が挑む構図は騎手対決でもあった。レースはウイニングチケットが柴田を男にし、ビワハヤヒデはまたも悔し涙を流した。余談だが、1カ月前の皐月賞で「臨時パス」を入手して初めてコース脇のカメラマン席に入った私は、レース後「ナリタタイシンだよ。武だよ」と付き添った編集者に語った声が、近くにあったマイクに拾われてしまった。念のためYouTubeで観ると今も音声が残っている。私が古参カメラマンだったら「これだから素人は…」と思ったかもしれない。JRAさん、ごめんなさい。

5年後のダービーは武豊にとって忘れられないスペシャルウィークでのダービー初制覇。皐月賞ではセイウンスカイに屈し、2着キングヘイローにも後塵を拝したが、競馬ファンはスペシャルウィークの力強さを知っていた。ただし2着は14番人気ポールドエンペラー。今は亡きカリスマ予想家の清水成駿氏（1馬）が「◎○」の大本線的中させている。こういう予想は必ずレース後に知るのだが、それはさておき、勝った武豊はあまりの嬉しさに記憶がなくなるほど飲みまわったそうだ。

アグネスタキオンが勝ったラジオたんぱ杯は「後付け3強対決」。優勝馬アグネスが皐月賞を勝ち、2着ジャングルポケットがダービーとジャパンCを制覇。3着クロフネは芝ダートGI馬となった。3頭とも種牡馬として大成功を収めた理由は、もしかすると横綱アグネスの早期引退で2頭がのびのび戦えたからかもしれない。

このほか「サイレンススズカ・グラスワンダー・エルコンドルパサー」の毎日王冠や「マヤノトップガン・サクラローレル・マーベラスサンデー」の天皇賞・春、「サトノダイヤモンド・マカヒキ・リオンデイズ」の日本ダービーなど「プチ3強」と思える対決も少なくないが、最後に、3強が制したGI数を合計して、「どの3強が最強か」計ってみよう。

トップはやはり「アーモンドアイ・コントレイル・デアリングタクト」。グレード制導入以前と比べてGIレースが倍増しているとはいえ、3頭が制したGI数は16（21年5月末現在）にも上る。うち2頭は現役であり、これから数字が増えていきそうな気配も漂う。

2位は「オグリキャップ・スーパークリーク・イナリワン」。オグリが4勝、クリークが3勝、イナリワン3勝の合計10勝とバランスは悪くない（ただし3頭決着は皆無）。

読者のみなさんにも、それぞれに3強対決が存在するだろうが、競馬ファンが愛した3強は、いずれも永遠に不滅です。



1993年日本ダービーの3強対決を制したのは柴田政人のウイニングチケット（右から2頭目）。



メジロマツクイーン

史上最強ステイヤーの

「降着劇」&「心肺機能」

1987年生まれ

牡

芦毛

長距離王

菊花賞を予想する際、必ず頭をよぎるのが「夏の上がり馬」の能力予測だ。皐月賞&ダービーに不出走ながら夏のローカル競馬で勝利を重ねてきた馬が、春の実績馬に敵うか否か。こうした予想も競馬の醍醐味の一つだ。

グレード制導入（1984年）以降の37年間で、皐月賞とダービーに不出走だった夏の上がり馬が菊花賞を制したのは17回。約半数ほどが「遅れてきた大物」であり、その代表的な存在がメジロマツクイーンだ。

デビュー前のマツクイーンは500キロをはるかに超える馬体で、調教を重ねてもなかなか絞れずにいた。ソエ^{*}に見舞われデビューは3歳2月。条件戦で2・3着を繰り返していたものの、栗東トレセンでの調教では息を乱さない。関係者の多くが「（兄の菊花賞馬）メジロデュレンより大物だ」と感じていたそうだ。

*ソエ 管骨の前面に起こる炎症。2、3歳の若い馬にみられる



9月に条件戦を連勝して挑んだ嵐山S（当時3000m）を2着。長距離適性を見せつけたものの、馬群をさばききれなかった鞍上・内田浩一の騎乗ミスで勝利を逃した。この結果を踏まえた調教師の池江敏郎は乗り替わりも考慮したが、メジロ牧場の総帥だった北野ミヤ氏の「一度のミスで若い人を降ろしたら可哀そうだ」の一言で、内田に唯一のGI勝利をもたらした。後に内田は「この馬の良さを引き出す競馬ができれば自然と勝利がついてくると感じていた」と筆者に語ってくれた。

古馬になった翌年、新たな鞍上となった武豊は、調教を終えて息を乱さないマックイーンをみて「心肺機能が優れている。指示にも素直に従うなど欠点が少ない」と感じ入ったというが、個人的にも、あれだけのロングスパートができる馬を初めて目にした。

春の天皇賞を制し、祖父メジロアサマ・父メジロテイタンとの親仔三代による同一GI制覇。それは6年前に他界した、メジロ牧場オーナー・北野豊吉氏（ミヤ氏の夫）の悲願であった。続く宝塚記念はメジロライアンの大駆けに屈したものの2着を死守。秋初戦の京都大賞典を楽勝して、タマモクロス以来2頭目（グレード制導入前の天皇賞勝ち馬はその後の天皇賞に出走ができなかった）となる天皇賞春秋制覇に挑んだ。

私事で恐縮だが、マックイーンの実弟・天皇賞・秋で筆者は競馬人生最大の大負けを喫した。

天皇賞は春が3200m、秋が2000mで、両方とも勝つのは難しい。歴代で春秋制覇

を遂げたのはタマモクロス、スーパークリーク、スペシャルウィーク、ティエムオペラオー、メイショウサムソン、キタサンブラックの6頭のみ。幅広い距離適性を問われるための難しさだが、筆者は「間違いなくマックイーンが勝つ」と信じて疑わなかった。

調教では強かった前走の勢いをキープしていた。初の東京だが左周りは中京の阪神大賞典を制している。出走馬のうちGI馬はマックイーンのみで格が違いすぎる。そして最大の理由は不良馬場。マックイーンが勝った菊花賞は重だった。しかもダートでも2勝を挙げておりパワー型の馬場も苦にしない。前走の京都大賞典から距離は400m短縮されるが、「距離は苦にしない」という鞍上・武豊のコメントを読んで「大丈夫」と踏んでいた。

単勝オッズをみると2倍ジャスト。「賭ける価値がある」と信じてなけなしの50万円を単勝にぶち込んだ。ハラハラドキドキしながら観ていると、ハナを切ったマックイーンは2着に6馬身をつけて先頭ゴールイン。「よっしゃあ!」と叫びながら払い戻し窓口に並んだが、レースはなかなか確定しない。20分が過ぎたころ、場内に次のようなアナウンスがなされた。「1位入線のメジロマックイーン号は他馬の進路を妨害したため18着に降着といたします」

ニュースでレース映像を確認すると1コーナー手前で左に進路を取ったマックイーンの斜行がきっかけで、進路が狭くなった他馬は行き場を失った。そのあたりを受けた中には落馬寸前の馬までおり、2着に繰り上がったカリブソングの鞍上・柴田政人は審議を見越したの

か、ゴール後、武豊に「ウイニングランはするな」と声をかけている。武豊はゴール直前でガッツポーズをしていたが、事の重大さに気付くとみるみるうちに顔が青ざめた。

この後、マックイーンはジャパンC4着、有馬記念2着と勝利から見離された。スランプに陥った武豊は12月の勝ち星ゼロ。41連敗を味わっている。

勝ち運から見離されたマックイーンだが、5歳春に阪神大賞典を勝つと、春の天皇賞を連覇した。1歳年下の二冠馬トウカイテイオー（5着）を相手にせず、4コーナー下りからのロングスパート。鞍上の武豊も「心底嬉しかった」と、半年前の挫折から蘇った。「世紀の対決」と称されたこのレースは世間の注目度も高く、初めて競馬が全国紙の一面を飾っている。

しかし、この対決でマックイーンは骨折を発症、1年の休養を余儀なくされた。翌春、3連覇のかかった春の天皇賞でライスシャワーに敗れるも、続く宝塚記念でメジロパーマーを打ち果たしGI4勝目をマーク。続く京都大賞典の勝利で獲得賞金は史上初の10億円超。しかし、雪辱を期して臨んだ天皇賞・秋の最終追い切りで故障を発生、引退となった。

総額7億円ものシンジケートにより種牡馬入りしたが、期待ほどの成績は残せなかった。重賞勝ち馬は5頭、重賞勝ち鞍は7つでGI優勝馬は皆無。ただしブルードメア（母の父）としてはステイゴールドとの配合でドリームジャーニー、オルフェーヴル、ゴールドシップと3頭のGI馬を輩出。ステイヤーの血脈は孫に受け継がれた。

（小川隆行）



1992年天皇賞・春でトウカイテイオーとの「世紀の対決」を制した。

3代血統表

メジロティターン 1978 芦毛	メジロアサマ 1966 芦毛	パーソロン 1960 鹿毛(愛)
		スキート 1951 芦毛(米)
	シエリル 1971 鹿毛(仏)	スノップ 1959 鹿毛(仏)
		Chanel 1961 鹿毛
メジロオーロラ 1978 栗毛	リマンド 1965 栗毛(英)	Alcide 1955 鹿毛(英)
		Admonish 1958 芦毛(愛)
	メジロアイリス 1964 黒鹿毛	ヒンドスタン 1946 黒鹿毛(英)
		アサマユリ 1959 栗毛

メジロマックイーン

父 メジロティターン

母 メジロオーロラ

母の父 リマンド

最終戦績 21戦12勝 (菊花賞 天皇賞・春2勝 宝塚記念)

距離適性 中～長距離

脚 質 先行

全 成 績

年月日	競馬場	レース名	距離	人気	着順	騎 手	タイム	馬体重	勝ち馬(2着馬)
1990/02/03	阪神	4歳新馬	ダ1700不	2	1	村本善之	1:47.7	492	(ハギノレジェンド)
1990/02/25	阪神	ゆきやなぎ賞	2000重	1	2	村本善之	2:04.6	486	シンボリデーバ
1990/05/12	京都	あやめ賞	2200良	1	3	村本善之	2:17.5	484	ホウユウロイヤル
1990/09/02	函館	渡島特別	ダ1700良	1	2	内田浩一	1:46.6	496	マンジュデンカブト
1990/09/16	函館	木古内特別	ダ1700重	1	1	内田浩一	1:47.3	498	(リキサンロイヤル)
1990/09/23	函館	大沼S	2000不	1	1	内田浩一	2:04.5	498	(トウショウアイ)
1990/10/13	京都	嵐山S	3000稍	1	2	内田浩一	3:06.6	480	ミスターアダムス
1990/11/04	京都	菊花賞 (GI)	3000重	4	1	内田浩一	3:06.2	484	(ホワイストーン)
1991/03/10	中京	阪神大賞典 (GI)	3000良	1	1	武豊	3:07.3	488	(ゴーサイン)
1991/04/28	京都	天皇賞(春) (GI)	3200良	1	1	武豊	3:18.8	482	(ミスターアダムス)
1991/06/09	京都	宝塚記念 (GI)	2200良	1	2	武豊	2:13.8	484	メジロライアン
1991/10/06	京都	京都大賞典 (GI)	2400良	1	1	武豊	2:26.5	486	(メイショウヒトリア)
1991/10/27	東京	天皇賞(秋) (GI)	2000不	1	18 (降)	武豊	2:02.9	498	プレクラスニー
1991/11/24	東京	ジャパンC (GI)	2400良	1	4	武豊	2:25.3	498	ゴールデンフェザント
1991/12/22	中山	有馬記念 (GI)	2500良	1	2	武豊	2:30.8	492	ダイユウサク
1992/03/15	阪神	阪神大賞典 (GI)	3000稍	1	1	武豊	3:13.5	492	(カミノクレッセ)
1992/04/26	京都	天皇賞(春) (GI)	3200良	2	1	武豊	3:20.0	490	(カミノクレッセ)
1993/04/04	阪神	産経大阪杯 (GI)	2000良	1	1	武豊	2:03.3	504	(ナイスネイチャ)
1993/04/25	京都	天皇賞(春) (GI)	3200良	1	2	武豊	3:17.5	500	ライスシャワー
1993/06/13	阪神	宝塚記念 (GI)	2200良	1	1	武豊	2:17.7	494	(イクノディクタス)
1993/10/10	京都	京都大賞典 (GI)	2400良	1	1	武豊	2:22.7	496	(レガシーワールド)

[12-6-1-2]

トウカイテイオー

自分史上最高の
グッドルッキングホース

1988年生まれ

牡

鹿毛

二冠馬

数ある競馬予想ファクターのうち、もっとも大事なのは「パドックと返し馬」だと思っている。レース直前の馬体（パドック）と状態（返し馬）をみることで、その馬の「現在の状態」を観察する。そのように競馬と対峙して40年近くになる。

学生時代からパドックに足を運び、生身の馬を観てきた私の、長い競馬歴の中のベストルッキングホースがトウカイテイオー。レースは5歳時の有馬記念だ。

中京で新馬戦を勝ち、京都のシクラメンS & 若駒Sで3連勝を挙げ、4戦目の若葉Sで初東上してきた。当時は関西のレースを関東のウインズでは買えず、中山のパドックで初めて目にした素晴らしさは「歩様」^{ほよう}だった。後脚の完歩^{*}Ⅱストライドが長く、歩き方が柔らかい。歩様がいいためお尻が美しく見える。後で関係者のコメントを読むと「つなぎ（球節から蹄の間）が柔らかい」とのことだった。

* 完歩 馬の歩幅。一完歩＝約7～8m



威風堂々。気品あふれる。王者の貫禄。私の脳裏にはそんな言葉が浮かんだ。

弥生賞を勝った2歳王者イブキマイカグラとともに単枠指定（馬連発売前で、断然人気馬は出走取り消しがあつた際に備えて1頭枠とされていた）された皐月賞でもパドックの雰囲気は素晴らしかった。レースでは大外18番から中団を進み、3コーナーを過ぎると持ったまま先頭*。結果は2着シャコーグレイドに1馬身差だったが「絶対に交わされない」内容だった。

続く日本ダービーも大外20番枠に単枠指定された。パドックの状態は皐月賞以上。見るたびに完歩の幅が長くなる、そんな雰囲気さえ感じた。皐月賞と同じく出走馬中唯一のピンク帽は4コーナー手前で大外を回り、2着レオダーバンに3馬身差。当時のダービーレコード（アイネスフウジン²の2分25秒3）にコンマ6秒及ばなかったが、大外を走つての内容だけに、内枠ならばレコードを更新していたかもしれない。

鞍上の安田隆行（現調教師）は、レース後の記念撮影でVサインを掲げた。多くのファンが父と同じ「無敗三冠」を期待したが、レース後に左後脚の骨折が判明、父仔二代での無敗三冠は幻と化した。秋の菊花賞はダービーで3馬身チギったレオダーバンが制覇している。

そんなテイオーの変化を感じたのが明け4歳だった。復帰初戦となった大阪杯は相手に恵まれ追うことなく楽勝。続く「世紀の対決」春の天皇賞で1番人気となるもメジロマツクイーンの5着に敗れ無敗記録が途絶えた。レース後に骨折が判明、半年間休養した秋初戦の天

*持ったまま 騎手が馬を追わないこと

ライスシャワー

小さな身体の

「スーパースティヤー」

1989年生まれ

牡

黒鹿毛

刺客

「あああ、という悲鳴に変わりました」——実況が場内の雰囲気を表していた。

1992年の菊花賞。7戦無敗のミホノブルボンが交わされた瞬間、京都競馬場に悲鳴がこだました。シンボリルドルフ以来となる史上5頭目の三冠馬誕生（しかも無敗）を期待していたファンの、ため息や落胆の感情である。「余計なことをするな！」との罵声も記憶している。もしも20年の菊花賞でアリストテレスがコントロールを交わしたとしたら、このときとおなじ雰囲気になっただろう。SNS上で「空気を読め！」などと書かれていたはずだ。

半年後。京都競馬場はまたも似た空気に包まれた。史上初となる春の天皇賞の3連覇に挑んだメジロマックイーンが、半年前のミホノブルボンと同じく偉業を阻止された。杉本清アナの「関東の刺客が天皇賞でも圧倒的な人気のメジロマックイーンを破りました」との実況から「刺客」というイメージも定着した。

ライスシャワーという馬名は「結婚式で米を降らせる儀式」であり「すべての人々に幸福が訪れるように」との意味を込めて命名された。礼宮さま（秋篠宮文仁親王）と紀子さまの納采の儀を祝福する意味もあったと言われている。

日本競馬史上屈指のスーパーステイヤ―（競馬の神様）大川慶次郎氏の言葉）は、二つの長距離GIを勝利したことで、本来なら馬名通り祝福されるはずが、王者の夢を二度も阻んだことから悪役視された。天皇賞後の勝利騎手インタビューでは「勝利の感想」というよりも「王者を倒した気分」を質問されている。

関係者の苦勞など知らないファンの勝手なイメージに対し、鞍上の的場均は「馬を擬人化するのも競馬の楽しみの一つだが、そうした見方では感じ取れない奥の深さを味わってほしい」と述べている。

競馬の奥深さ。それはたとえば展開だ。

菊花賞を勝った要因の一つにキョウエイボーガンの出走がある。スプリングS・皐月賞・日本ダービー・京都新聞杯と過去4戦すべてでハナを切っていたミホノブルボンは常に自分のペースでレースを進めてきた。ハナを切ってスローペースに落とすのが勝ちパターンであるが、キョウエイボーガンにペースを握られてしまった。前半1000m 59秒7。ライスシャワーに騎乗した的場はこの展開をレース前から意識しており、ゴール直前で逆転するイメ

ージを描いていた。その作戦が見事にハマったわけである。

ライスシャワーが教えてくれた競馬の奥深さ、もう一つは「馬の気性」だ。人間の性格と同じく、馬の性格もさまざま。調教を積み重ねたライスシャワーは闘争心の塊となっていた。「下手に怒らせたら指や足をくいちぎられるほどの恐ろしさを出していた。まるで猛獣だった」と後の場は述べている。

好不調を繰り返すのも生き物である。春の天皇賞後、休養したライスシャワーは9戦も勝利から見放された。それまでの実績から京都記念で60キロ、日経賞では59キロを背負わされ敗戦を重ねた。440キロ台と小柄な馬体だけに、不調時は重さが堪^{こた}えたはずだ。

復活の舞台は京都3200m。マックイーンを破って以来10戦ぶりとなる春の天皇賞で、3コーナーからマクリを仕掛けた。長距離戦でのロングスパートはセオリーに反するが、それは距離がもたない馬の話。3度出走した3000m以上のレースはいずれも勝っている。文字通り本物のステイヤーだった。

しかし、重馬場の天皇賞を激走した代償は大きかった。続く宝塚記念で思いもよらぬ悲劇が待っていた。

陣営は出走回避も検討したが、ファン投票1位に選ばれたこと、阪神・淡路大震災の影響で得意の京都コースで開催されること、ライバルとなりそうなナリタブライアンが回避する

ことなど好条件が重なり出走を決めた。

しかし、スタート後に様子がおかしいと感じたのは、勝利よりも馬に負担をかけないことを考えた。騎乗し続けた騎手にしかわからぬ違和感。3コーナー手前でライスシャワーは前のめりになり、身体を起こそうとした瞬間に脚が折れた。テレビから場内の「キャー」という悲鳴が聞こえてきたのが忘れられない。

レース後に映し出されたライスシャワーは立ち上がることもできなかった。数分後、落馬地点に大きな幕が張られた。ファンが初めて目にする「幕」は、その場で安楽死の措置をとることを意味していた。

競馬とは、私たちにさまざまな喜怒哀楽を与えてくれる。好きな馬が勝ったり馬券が当たると嬉しくて楽しい。馬券を買った騎手が無様な乗り方をしたら怒りを覚えることすらある（買った自分が悪いのだが）。

でも、このときだけは、そうした感情とは別の、哀れみや悲しみを感じてならなかった。数日後、葬儀で涙を流した川島文夫厩務員の姿はいまだに脳裏に焼き付いている。5年間、苦楽をともしたかわいいたートナーに「安らかに眠ってくれ」と手を合わせている。そのシーンを見た私は「長い間、楽しませてくれてありがとう」と心の中で感謝をした。

（小川隆行）



1993年天皇賞（春）でメジロマックイーンの3連覇を阻止した。

3代血統表

リアルシャダイ 1979 黒鹿毛(米)	Roberto 1969 鹿毛(米)	Hail to Reason 1958 黒鹿毛(米)
		Bramalea 1959 黒鹿毛(米)
	Desert Vixen 1970 黒鹿毛(米)	In Reality 1964 鹿毛(米)
		Desert Trial 1963 栗毛
ライラックポイント 1979 黒鹿毛	マルゼンスキー 1974 鹿毛	Nijinsky 1967 鹿毛(加)
		シル 1970 鹿毛(米)
	クリカツラ 1962 黒鹿毛	ティエボロ 1955 鹿毛(伊)
		クリノホシ 1953 鹿毛

ライスシャワー

父 リアルシャダイ

最終成績 25戦6勝 (菊花賞 天皇賞・春2勝)

母 ライラックポイント

距離適性 長距離

母の父 マルゼンスキー

脚質 先行

全成績

年月日	競馬場	レース名	距離	人気	着順	騎手	タイム	馬体重	勝ち馬(2着馬)
1991/08/10	新潟	3歳新馬	1000良	2	1	水野貴広	0:58.6	446	(ダイイチリユモン)
1991/09/01	新潟	新潟3歳S (GI)	1200良	3	11	菅原泰夫	1:11.7	446	ユートジェーン
1991/09/21	中山	芙蓉S	1600重	2	1	水野貴広	1:36.1	444	(アララットサン)
1992/03/29	中山	フジTVスプリングS (GI)	1800重	12	4	柴田政人	1:51.7	450	ミホノブルボン
1992/04/19	中山	皐月賞 (GI)	2000良	11	8	的場均	2:02.8	438	ミホノブルボン
1992/05/10	東京	NHK杯 (GI)	2000重	9	8	的場均	2:03.4	434	ナリタタイセイ
1992/05/31	東京	東京優駿 (GI)	2400稍	16	2	的場均	2:28.5	430	ミホノブルボン
1992/09/27	中山	セントライト記念 (GI)	2200良	3	2	田中勝春	2:13.6	442	レガシーワールド
1992/10/18	京都	京都新聞杯 (GI)	2200良	2	2	的場均	2:12.2	438	ミホノブルボン
1992/11/08	京都	菊花賞 (GI)	3000良	2	1	的場均	3:05.0	438	(ミホノブルボン)
1992/12/27	中山	有馬記念 (GI)	2500良	2	8	的場均	2:34.1	446	メジロパーマー
1993/02/21	東京	目黒記念 (GI)	2500良	2	2	的場均	2:32.8	448	マチカネタンホイザ
1993/03/21	中山	日経賞 (GI)	2500良	1	1	的場均	2:35.8	442	(イタリアンカラー)
1993/04/25	京都	天皇賞(春) (GI)	3200良	2	1	的場均	3:17.1	430	(メジロマックイーン)
1993/09/19	中山	産経賞オールカマー (GI)	2200良	1	3	的場均	2:13.6	436	ツインターボ
1993/10/31	東京	天皇賞(秋) (GI)	2000良	1	6	的場均	1:59.6	444	ヤマニンゼファー
1993/11/28	東京	ジャパンC (GI)	2400良	7	14	的場均	2:25.9	444	レガシーワールド
1993/12/26	中山	有馬記念 (GI)	2500良	5	8	的場均	2:32.1	446	トウカイテイオー
1994/02/13	阪神	京都記念 (GI)	2200稍	2	5	的場均	2:18.3	444	ビワハヤヒデ
1994/03/20	中山	日経賞 (GI)	2500良	2	2	的場均	2:32.8	442	ステージチャンプ
1994/12/25	中山	有馬記念 (GI)	2500良	4	3	的場均	2:33.1	452	ナリタブライアン
1995/02/12	京都	京都記念 (GI)	2200良	1	6	的場均	2:12.5	450	ワコーチカコ
1995/03/19	中山	日経賞 (GI)	2500不	1	6	的場均	2:42.3	446	インターライナー
1995/04/23	京都	天皇賞(春) (GI)	3200重	4	1	的場均	3:19.9	442	(ステージチャンプ)
1995/06/04	京都	宝塚記念 (GI)	2200稍	3	中	的場均	—	438	ダンツシアトル

[6-5-2-12]

ナリタブライアン

怪我に泣かされた

「シャドーロールの怪物」

1991年生まれ

牡

黒鹿毛

怪物

あの怪我さえなければ——。故障によって全盛期のパフォーマンスを発揮できなくなった
り、未完の利器で終わるスポーツ選手は少なくないが、それは競走馬も同じ。

“幻の三冠馬” フジキセキと皐月賞馬アグネスタキオンは屈腱炎を発症し、ともに4戦無敗
で引退。クラシック二冠ドウラメンテは左前脚を故障し、9戦5勝2着4回というパーフェ
クト連対のまま引退している。

そして、ナリタブライアンも「あの怪我さえなければ」と惜しまれる名馬のなかの1頭で
はないだろうか。

1993年、3強の一角としてクラシック戦線を沸かしていたビワハヤヒデの弟というこ
ともあり注目度は高く、素質は折り紙つき。デビュー前の調教に騎乗した南井克巳が「オグ
リキャップと同じ感触」と評するほどだった。

8月のデビュー戦は2着に終わるも中1週で折り返しの新馬戦を快勝。その後、函館3歳Sが6着、きんもくせい特別で2勝目を挙げるが、デイリー杯3歳Sが3着と成績は安定しない。

その理由はハッキリしていた。気性面の問題である。

もともと興奮しやすく、臆病なところがあり、レースでは能力を十分に発揮できていなかったのだ。そこで、下方の視界をさえぎるシャドーロールをつけたところ、見違えるほど集中力を発揮するようになり、京都3歳Sをレコードで勝利。これが「シャドーロールの怪物」誕生の瞬間といってもいいだろう。

ここから連勝劇が始まる。暮れの朝日杯3歳Sを1番人気で勝利し、最優秀3歳牡馬に出されると、翌年も共同通信杯とスプリングSを連勝。過密ローテともいえるが、前述の「興奮しやすい精神面」の対策として、間隔を詰めることでガス抜きを図っていたのだ。

そうして臨んだ三冠レースは「圧巻」の一言に尽きる。単勝1・6倍の皐月賞はコースレコードで勝利し、まず一冠。二冠目の日本ダービーでは皐月賞を上回る単勝1・2倍の支持を集めた。前年の同レースでマルチマックスに騎乗し、スタート直後に落馬している南井は「怖いのはアクシデントのみ」とばかりに常に外を回る安全運転に徹する。道中は好位の外を追走、4コーナーで早くも先頭に並びかけると、「距離のロスもなんのその」と直線のだ真ん中

『ウマ娘』初の 公式アンソロジーコミック!!



**『ウマ娘』初の
公式アンソロジーコミック!!**
読んだらもっと好きになる!!
綺羅星の豪華作家陣!!

Cover Illustration 手島 nari.

読んだらもっと
好きになる!!

**ウマ娘
プリティーダービー
アンソロジーコミック
STAR**

綺羅星の豪華作家陣が贈る、
読んだらもっと『ウマ娘』が
好きになる作品集!
かわいさと楽しさが
タップリ詰まった11作品、
ご堪能あれ!!

絶賛発売中!

『ウマ娘』愛が炸裂! 豪華作家陣!

有都あらゆる
おえかきえんびつ
大沖
小野ミサオ
とんぶう
鯉乃るかん

ハンバーガー
アマイワシ
なをををををを
あおいまなぶ
だーく

競馬がもっとも 熱かった時代!

**競馬 伝説の名勝負
90年代前半戦**

小川隆行・ウマフリ 編著

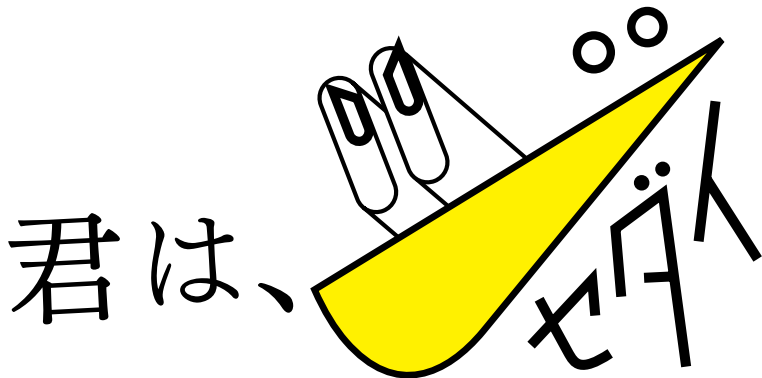
90年代からゼロ年代まで、
黄金時代を彩った
伝説の名勝負を集大成。

第1弾は、オグリ、マックイーン、
テイオー、ブルボンが駆け抜けた
90年代前半を収録

星海社新書の近刊



2021年8月より
順次刊行決定!



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!